

白金葎

増田悦子さん追討号

1 1 月号



平成28年1 1 月発行

第6 9 号

白金葭定例会案内

十二月十六日（金）アビスタ第5兼題…枯野、炬燵

一月二十（金）兼題…新年一般

二月十七日（金）" 第四兼題…雪解、梅

兼題句参考句（十二月十六日分 枯野、炬燵）

いつ来ても枯野にのこる汽笛の尾
つひに吾も枯野のとほき樹となるか

どこまでも阿Qがゆくや大枯野

ひとりがよく喋る枯野のふたり連れ

わが影の吹かれて長き枯野かな

一句二句三句四句五句枯野の句

一筋に光る川あり大枯野

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

炬燵に穴のこして海を見にゆけり

炬燵の間鯨のような父がいる

炬燵出て歩いてゆけば嵐山

あでやかな炬燵蒲団につまづきぬ

炬燵寝の猫の魔性の眼を開く

目覚むれば妻もうたた寝相炬燵

暖炉つけ炬燵に入り籠りをり

月例会会報（'16／11／18 9名欠3神無月、沢庵漬け）

飯田孝三

襷掛け沢庵つけて子沢山

小さき手の鰐口ゆする七五三

玉葱の籠に主^{あるじ}待つ水中眼鏡

あぢさゐの藍のきはみに逝きませる

ひもろぎの鳩に餌やる神の留守

増田陽一

ままごとの如き仏事も雁の頃

過ぎし日を夢と知るべし栗を焼く

妻の骨埋め秋夜ぐしゃつと酔うのだ

登山靴何処に捨てやう神の留守

ヴェランダに漬ける沢庵遠筑波

光成高志

ライスセンターへ委託田圃の櫓かな

線路沿ひ朝日に透けて枯芒

菅野蒔子

四戸和彦

下平しづ子

市川恵子

久保田万太郎

飛山正子

松尾芭蕉

大石雄鬼

高橋富久江

波多野爽波

波多野爽波

市川恵子

下平しづ子

四戸和彦

神無月皇帝ダリア花かゝげ

沢庵漬母が塩振り僕が踏む

休耕地のソーラーパネル冬に入る

光
みち

マスクして白隠慧鶴の絵図に立つ

凧一号吹かるるものに犬の貌

火事出して沢庵漬ける樽残る

「将門」の見得切る舞台神の留守（日本舞踏）

シュミーズの少女の像や小六月

松村幸一

沢庵といふ金無垢に変身す

鰐口を大きく振って神の留守

福助の慇懃の頭の夜長かな

凧一号大統領が決まりたる

惜命忌雑木は晴れを尽くしけり

吉羽多美子

裏川の鯉の色増す神無月

コーヒーに砂糖ひとつを秋灯下

迷ひ込む路地の格子戸石露明り

沢庵漬厚く切るのは母のくせ

縁側に正座の膝に冬来る

倉田紀子

弥彦^{いやひこ}の刈田に影の稲架木かな

墓ひとつ残して冬田広がり

秋澄むや本堂に和す讃仏偈

能果てのシテの摺り足秋思かな

「羽衣」や笛の高音に始まれり

浅野正美

小春日を歩く庭園山路めく

沢庵漬母の味似て買い求む

榎櫃の実黄色増すごと香りたつ

神無月喪中のハガキ届きけり

校庭をとりまく樹々の片もみじ

武者昭七

昔のことさと笑ひ捨てたる夜長かな

舞ひ出した雪払ひつつ市に立つ（輪島朝市）

秋の陽や蝶軽やかに舞ひ遊ぶ

波の穂に神の気配や神無月（出雲海岸）

早贄を刺して翔び去る影を見つ

夕焼けの奈落に明星現はるる

干し大根皺深まりて山嵐

神無月十字架の尖塔点灯す

義齒の身に沢庵漬の恨めしき

沼の果て日は燃え尽きて入寂す

木の実落つトタン屋根から神無月

瓢箪のような男がガムを噛む

ついでにて鳥居をくぐる宮参

さじで食う栗の中身は月の色

がまずみが少し酸っぱい十三夜

磯目健二

小山陽也

神無月なれど月一の神詣で

烏瓜今年はやけに多く生り

行きつけの店の熊手は太くなり

我が庭の花柚子小さく実りけり

これからは落葉燃やしの日々となる

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

6 墓ひとつ残して冬田広がれり 紀子

4 妻の骨埋め秋夜ぐしゃつと酔うのだ 陽一

3 櫛がけ沢庵つけて子沢山 孝三

3 裏川の鯉の色増す神無月 多美子

3 ままごとの如き仏事も雁の頃 陽一

3 さじで食う栗の中味は月の色 啓泰

3 さじで食う栗の中身は月の色

3 ヴェランダに漬ける沢庵遠筑波 陽一

3 波の穂に神の気配や神無月（出雲海岸） 昭七

2 波の穂に神の気配や神在月（出雲海岸） 多美子

2 沢庵漬厚く切るのは母のくせ 多美子

2 能果てのシテの摺り足秋思かな 紀子

2 迷ひ込む路地の格子戸石露明り 多美子

1	迷ひ込む路地の格子や石路明り	
1	沢庵漬母が塩振り僕が踏む	高志
1	縁側に正座の膝に冬来る	多美子
1	義齒の身に沢庵漬の恨めしき	健二
1	凧一号吹かるるものに犬の貌	みち
1	鰐口を大きく振つて神の留守	幸一
1	沢庵といふ金無垢に変身す	〃
1	がまずみが少し酸っぱい十三夜	啓泰
1	小春日に歩く庭園山路めく	正美
1	小春日を歩く庭園山路めく	孝三
1	小さき手の鰐口ゆする七五三	陽一
1	過ぎし日を夢と知るべし栗を焼く	幸一
1	惜命忌雑木は晴れを尽くしけり	孝三
1	玉葱の籠に主待つ水中眼鏡（悦子さん追悼）	幸一
1	福助の慇懃の頭の夜長かな	陽一
1	登山靴何処に捨てやう神の留守	正美
1	神無月喪中のハガキ届きけり	健二
1	神無月十字架の尖塔点灯す	〃
1	干し大根皺深まりて山風	孝三
1	あぢさゐの藍のきはみに逝きませる（悦子さん追悼）	昭七
1	早贄を刺して翔び去る影を見つ	幸一
1	凧一号大統領が決まりたる	陽也
1	行きつけの店の熊手は太くなり	

1

健二	夕焼けの奈落に明星現われる
高志	夕焼けの奈落に明星現はるる
高志	神無月皇帝ダリア花かゝげ
正美	校庭をとりまく樹々の片もみじ
啓泰	ついでにて鳥居をくぐる宮参
みち	シューミーズの少女の像や小六月
〃	「将門」の見得切る舞台神の留守（日本舞踏）
陽也	神無月なれど月一の神詣で
紀子	「羽衣」や笛の高音に始まり
啓泰	木の実落つトタン屋根から神無月
みち	火事出して沢庵漬ける樽残る
正美	榎櫃の実黄色増すごと香りたつ
紀子	秋澄むや本堂に和す讃仏偈
昭七	秋の陽や蝶軽やかに舞ひ遊ぶ
高志	ライスセンターへ委託田圃の櫓かな
陽也	烏瓜今年はやけに多く生り
多美子	コーヒーに砂糖ひとつを秋灯下
昭七	舞ひ出した雪払ひつつ市に立つ（輪島朝市）
正美	沢庵漬母の味似て買い求む
啓泰	瓢箪のような男がガムを噛む
陽也	これからは落葉燃やしの日々となる
健二	沼の果て日は燃え尽きて入寂す
高志	休耕地のソーラーパネル冬に入る

ひもろぎの鳩に餌やる神の留守

孝三

線路沿ひ朝日に透けて枯芒

高志

我が庭の花柚子小さく実りけり

陽也

マスクして白隠慧鶴の絵図に立つ

みち

弥彦いひこの刈田に影の稲架木かな

紀子

昔のことさと笑ひ捨てたる夜長かな

昭七

一句鑑賞

磯目健二

裏川の鯉の色増す神無月

多美子

釣りが目的で結婚早々手賀沼のほとりに越してきた。片目を失つて釣りは止めたが、今でも淡水魚は大好きだ。少年の頃、釣ってきた獲物は母の手で食卓に出た。

恵比須講近い神無月ともなれば、家の裏を流れる野川の水もやや涸れて冷たく澄んでくる。深ん所に身を潜める鯉は、背の色まではずきり見えてくる。この季節、鯉は太つてきている。青黒い真鯉でなく稀にいる緋鯉だったら、冷え込みとともに更に色が冴えよう。釣り達者な老爺に鯉は一日一寸釣ると教わった。尺鯉なら十日通う気構えが要る。それほど鯉釣りは難しかった。追憶と望郷の念を誘われる季節感豊かな佳句である。

一句鑑賞

光成高志

櫻がけ沢庵つけて子沢山

孝三

兼題は沢庵漬けの積りであつたので、その旨直前に申し上げたので即吟された句でしょう。今は家庭ではもうこういう風景はなくなつてしまつた。昭和の時代の健全な生活の姿であるという声が聞こえたがまさしくそうである。子沢山の唐突感を緩和するには倒置する表現もあるでしょう。

墓ひとつ残して冬田広がり

紀子

郷里の新潟への旅吟であるとか。どこかで見た光景であつた。飛鳥の入鹿の墓、津軽の北畠累代の墓など蕭条とした冬田の中にぽつんと立つ。墓ひとつは一基か墓地一面かという推察が聞かれたが、これは墓一基である。作者もそう言われた。中七の表現がややゆるんでいるという指摘はそうであろう。「唯一基青田の中に墓が立つ」(誓子)という完璧な句があるが、墓ひとつと冬田の広がりとは人の歴史への共感を呼び起こす。さじで食う栗の中身は月の色

啓泰

栗の色から月に飛躍した発想力が啓泰さんらしく力強い。匙で掬つて食つたお蔭である。栗名月に響く。

神無月喪中の葉書届きけり

正美

喪中の葉書は年賀状の用意を始める前に手元に届くよう11月中か遅くとも12月初旬頃までには届くように出すのがマナーとか。喪中葉書が届くのも季節感が確とある。神無月の季語が効いているのだ。

夕焼けの奈落に明星現はるる

健二

夕焼けの奈落と断定されたところが危うい表現であるが、夕焼け空の底ともとれるし、太陽の日で真赤に燃えた地獄のような空にともとれるから、新しい解釈ではないかと直覺して取った句。明星は金星の事で、十一月は宵の明星として、南西の低い空に現れる。ほんととはすぐに沈んで見えなくなるのだが、夕焼けの中に金星が現れたという感動が伝わる。手賀沼での嘯目吟とは作者の弁。夕焼けの沼面の上に富士山のシルエツトとスカイツリーまで見通せる我孫子八景の一つ。こういう句を読むと、「造化にしたがひ、造化にかへれとなり」と朗誦したくなる。

一句鑑賞

武者昭七

これからは落葉燃やしの日々となる

陽也

「落葉燃やし」（落葉焚き）とはなんとも懐かしい言葉だ。ほとんど死語にちかいだろう。公園に散り敷いた落葉もその場で燃やすこともなく清掃車が持ち去ってしまう。冬の風物詩がまた一つ消えた。咏者は散り敷いた落葉を前に困惑と期待を抱いて庭に立っている。沼の果て日は燃えつきて入寂す

健二

落日に映えていた水のおもてが静かに暮れて一日が終わる。単なる水辺落日の叙景句ではない。「入寂」の

一語によつてそれはたちまち莊嚴な曼荼羅図に変容するのである。一語が生きて働くとはこのことだ。

義齒の身に沢庵漬けの恨めしき

〃

一読共感をさそわれる句である。厚切りの沢庵をポリポリ噛んだ若い日々がなつかしい。思い出しては思わず漬物屋の店先にしばしたたずんでしまう。入歯世代の今は昔の夢である。

沢庵漬け母が塩振り僕が踏む

高志

少年の日の思い出の一場面。秋日和の庭先の光景が目にかぶ。「僕が踏む」とはまさに言い得て妙。咏者も母もともに少年の日に帰っているのだ。あの頃の母も若く美しかった。

妻の骨埋め秋夜ぐしゃと酔うのだ

陽一

句末の断定調が重い。咏者は懸命に自分に言い聞かせる。酔う以外に何ができよう。何が何でも酔うのだ。ぐつしやとなるまで酔うんだ。それ以外ではないか。上の句の感傷を拒絶したリアリズムも鬼気迫る。深い悲しみが定型の枠を破つてあふれだすのである。定形に収まりきれない激情というものもある。俳句はそれをどうしてくれる。

風一号吹かるものに犬の貌

みち

風一号の中を飼い主にひかれて散歩に出かけた。ベツトだろうか。なにしろ初めての強風なのだ。おまけに

やけに冷たい。ワンちゃんにとってもはじめての経験だ。「世間は甘くない」と悟った顔だろうか。

一句鑑賞

飯田孝三

裏川の鯉の色増す神無月

多美子

裏川だから、家や野山の陰をゆく小流れだろう。鯉の「色増す」が晩秋初冬の気韻をひたと伝える。「かなづき」の語の由来には諸説あるようだが、「神無月」が韻象相剩、肅条の気を深める。互選披講では鯉の「色」が緋鯉、真鯉と話題になったが、後者で一同一致した。ままごとの如き仏事も雁の頃

陽一

仏事は葬儀や七七忌、納骨の法要など。とくに法要は、ふつう遺族や限られた親族でしめやかにとり行われる。折しも雁渡る空の寂寥が残された者の悲傷と響き合う。仏事「も」の情懷が句のかなめ。告別から一連の法事の果てに、鴛鴦の過ぎし日々を偲び悲しむのである。

凧一合吹かるものに犬の貌

みち

「凧」は冬の初に吹く強い北風、「一号」はその一番手。眼前、草木の葉が吹かれ散る野面を繰延べ、吹きしぶかれる犬の貌をズームアップ。犬は飼犬、連れ立つ散歩の一場面だろう。猫では凧の野面は見えぬ、馬ではすつ飛ぶ、犬はもつとも身近、冬に入る生活の情

景までが見えてくる。

惜命忌雑木は晴れを尽くしけり

幸一

惜命忌は波郷の忌、十一月二十一日。折しも晴れつくす、命終の地、清瀬の雑木の空をふり仰ぎ、いまさら波郷を偲び惜しむのである。澄みきわめる疎林の空は、肅々、「病む生なりき」波郷の一生に通うだろう。つくづく、「けり」の情懷は深い。

沢庵漬け母が塩振り僕が踏む

高志

情景の説明は要らない。ばくもやった。昭和は前半に育った者、ことに男子なら、消費地の都会育ちは別、みんな知る小春の我が家の風景だ。「母」と「僕」を並べたのがにくい。つい目頭が熱くなっちゃう。日のこの山並みが見え、せせらぎが聞こえてくる。(11.22)

一句鑑賞

増田陽一

襷がけ沢庵つけて子沢山

孝三

「沢庵」の語に既に回顧的な味があり、この句には嘗ての日本の家族の典型的な母親像が凝縮されている。下五に至る快適なリズムによってこの働き者のお母さんの活躍ぶりが表現されているのである。沢庵はある量を漬けないと味が出ないから、今では

沢庵漬母の味似て買い求む

正美

ということになる。味見してから買ったのであろう。

「母の味して」ではなく「味似て」と細かいのは「母の味には少し及ばないけれど、」との気持ちであろうか。早贄を刺して翔び去る影を見つ

昭七

近年、鴟の鳥も少なくなり、早贄を見ることが稀になった。まして蛙、蜥蜴など捕って枝に刺す瞬間など見ることはまずなからう。中西悟堂の『野鳥記』でさえ載っていない。ただ作者の心眼のみが、このすばやい動きを捉えて活写、造形したのである。

休耕地のソーラーパネル冬に入る

高志

少し前までは稲田であったところが休耕となり太陽発電の板が並んで居る。あれあれ、と思う世の変転、伝来の農と、最新技術のコントラスト。田圃の跡なら広い水平面だから、これを並べるに最適かも知れない。地質の専門家である作者ならではの興味と視点であろう。

火事出して沢庵漬ける樽残る

みち

火事出して、残ったのは沢庵の樽、などと単純化することですぐ軽い滑稽味さえ感じさせるけれど、背後には一家、一村の浮沈に関する大事がある。深刻な言い方をせず「樽残る」といふ着眼点が俳諧味であろう。火事と沢庵ですぐ連想されるのは斎藤茂吉の「かへりこし家にあかつきのちやぶ台の火燄^{ほのほ}の香する澤庵を食む」である。留学から帰朝する直前の火事で彼の病院

も独逸から送り溜めた書籍も全て烏有に帰したという。掲句はこの歌をつづめて言っているようでもある。

裏川の鯉の色増す神無月

多美子

川の鯉だから普通の真鯉かと思うけれど、色鮮やかに見えるのは、川水が澄んだからか、鯉も夏の疲れが失せて元気になったのか、在りうることである。秋深まった川に鯉の色の变化を見た感性はさすが。

墓ひとつ残して冬田広がり

紀子

新幹線の途中でよく見たような記憶は僕だけではなかったらしい。広い田の面に残る墓が目立つ蕭条たる空間。屢、その墓の銘は「陸軍何等兵誰々」であったりして、地域の歴史も感じさせるようである。

沼の果て日は燃えつきて入寂す

健二

手賀沼の夕景と言う。まことに沼の彼方、夕富士の辺りに見える、高僧の死に言う「入寂」の語にふさわしい輝きをもって冬の太陽が沈む荘厳の光景。

福助の慇懃の頭の夜長かな

幸一

福助という日本のポップアート、昔から羽織袴の同じ姿で座っている縁起人形、と夜長との取り合わせが何とも面白い。大頭を傾げて変わらぬ曖昧な微笑を浮かべながら手を付き畏まっている彼は、夜の座敷に人間の何を見ているのであろうか。

お便り広場（到着順、敬称略）

結構な品物を賜りました。ありがとうございます。

（中略）今年中お二人で我孫子までお出で頂ければお昼でも御一緒しませんか。とにかくくれぐれも御身体を御大切にしてください。

（10/27 小山陽也）

「オリーブの果汁で乾杯共白髪」とんだお気を遣わせてしまいました。恐縮です。何よりの物を有難うございました。「はしけやしあな満々とオリーブの精」老々、しみじみのち潤させて頂きます。先年の小豆島駆け足旅行のあちこちを思い出します。「オリーブ探る瞳きらきら岬の子」冬に入ります。御身ともぐお大事にご健吟の裡を祈り上げます。お礼まで。（10/28 孝三）今年も早や十一月に入りましたね。その後体調如何ですか。白金霞10月号受け取りました。あまり無理せずゆつくりとして下さい。何か会費*等必要ないかと思ひ乍拝見しております。私は体調も良く秋の取入れ自分一人ですませました。元気で仕事できることに感謝の毎日です。今日は玉ねぎ植え付け準備穴あきマルチを敷いて準備しました。元氣でいますのでご安心下さい。敏子さんしっかりブレーキをかけてください。妻偲び十三回忌終えにけり

（11/1 健三）

（*皆さまから一部千円頂いています。よろしかったら、次の10

周年記念号の基金にしますので、先の本の裏表紙にある口座へどんと振り込んでおいてください。）



お疲れが出たのですね。びっくりしました。狭心症とのこと先日のお電話にて伺いました。ハードスケージュールの日々を送ってこられたのではと拝察致しておりました。ここらあたりで小休止なさって下さい。過日日展鑑賞は奥様ご同伴でいらつしやった旨、ご心配でおられたのですね。とにかくゆつくりゆつくり大きな空を見上げ深呼吸をしてみして下さい。そして身体の中に溜った余分な物を吐き出してみて下さい。お茶を一服どうぞ召し上がって下さい。呉々も大切に。

光成高志様 奥様

（11 加納綾女）

調子是如何ですか？手賀沼エコマラソンの完走Tシャツを送ります。何十年？ぶりの参加でしたが、人数も増えて人気大会になっていました。Tシャツぜひ受け取って下さい。また連絡します。

（11.2 拓也）

御葉書頂きました。十三日（日）正午頃我孫子駅改札口に伺います。私も含めて六人ですね。いろいろ教えて下さい。近頃すっかりダラクして毎日のんびりです。

振動の勉強は中止西洋美術史は十一月十三日以降は来年夏頃迄お休みです。光成さんもあまりムリをなさらないで下さい。十三日を楽しみにしています。

(11陽也)

十月二十五日付のお便りと美しい野鳥のエハガキ沢山頂きながらごぶさた申し訳なく御礼と共にお詫び申し上げます。ヨタク毎日のことをしている中に夕暮れが早く一日予定のことを出来ず、後悔の中に日を送っております。エハガキは、オジロノビタキが特に気に入っております。小鳥来る、色鳥と云っても実際にはまだあまり来ていません。四十雀と山ガラが今ポツく来始めました。冬になりました。お大切にお過ごし下さいませ。光みち様 (11月8日 長屋璃子)

立冬を迎え、ことしもここまで来たかと云う思いであります。ご病状いかがでいらつしやいますか。白金葎の編集などご負担になることを恐れております。私は達者ながら一人で生きて行くにはあまりに沢山のことが肩にのしかかり、優先順位をつけて片付けるべく四苦八苦しております。急な気温の差にお気をつけて下さいませ。光成高志様 (11月8日 長屋璃子)

高志様 大変失礼してしまいました。封書を頂きました頃から今日まで福山の母のところへ行ったり来たり、島根の夫の親族高齢の人々が次々と変化を来たし

多忙を極めました。貴方の作品は落ち着いてゆつくり読ませて頂かねばと机の上に置いたままに楽しみにしております。昨日やっと読ませて頂きびつくりしてしまいました。(中略) ゆつくりしつかり養生して下さいね残る人生は楽しいものにしましょうね (11勝子)

(中略のところ、適切なアドバイスありがとう。10月に書きましたように何事も腹八分目の養生訓を守って生活しております。貴女の言う通りオリブ油を使っています。若い医者からは何をしてもOKと言われていますが、人に頼ることなく、自分なりの俳句生活を送っています。貴女は俳句はやめたの？高志)

十三日はまことにありがとうございました。非常に雰囲気の良いしかもおいしい料理で上々でした。そして帰途公園から楚人冠の書齋まで、その上結構なお土産まで頂き非常に恐縮しております。光成さんも昔と変わらぬお姿を拝見してすつかり安心しました。くれぐも御身体を御大切にして下さい。来年暖かくなりましたら梅の花で如何でしょうか？この手紙書き上げて行方不明二度目です。ボケですね。駄句五句送ります。

(一) 駄句ばかりです。

(11.14 小山陽也)

千葉の会150回記念吟行会ということで18・19日と泊りがけで近江八幡へ行ってきます。短冊を同封しました。どうぞ皆さまへよろしくお伝え下さい。

(11.14 幸一)

おかげんいかがでいらつしやいますか。白金葎の發行にご無理をなさつていらつしやることゝ心配しております。句会では十一月に「狸」が兼題ででしたが、実物ならずとも皆々何とか詠むものと感心しました。寒さもそれらしくなつて来ました。みち様共々十二分の健康管理をなさしますようお願い申し上げます。
光成様　みち様

(115 長屋璃子)

きのうは大変お世話になりました。コビアンでの話などで疲れたのではないでしょうか。心配です。小生の到着が遅かったためみちさんには蕎麦屋に見届けに行つて下さつたのに気づかず済みませんでした。恥じ入ります。これからもアビスタに直行するつもりです。悦子さん追悼文別紙よろしく願ひします。一句鑑賞本文は来週に入つてからFAXします。(119 孝三)
喪中の欠礼のごあいさつ謹んで拝読いたしました。ここに故お兄様方のご冥福をお祈り申し上げますと共にご家族ご一同様のご健勝を祈念いたします。

(二〇一六年十一月二十一日　長屋璃子)

受贈誌 (H 28年 11月号)

野仏のみんな豊類草の花 (彩131号)　平野ひろし
草紅葉湯守に薬師観世音 (11)　〃
湯治宿夕べしきりに雪ばんば (11)　〃

草茂る円墳そそげ髪となり (11)　小泉　博
野を歩み畔を歩みて鴟日和 (あすか11月号)　野木桃花
黒塀の内に葎簀を小商ひ (11)　山尾かづひろ
紅葉の一葉を連れて戻りきし (東京ク11月)　輝子
傘ひろげ受ける見沼野霽余子採り (11)　理佳江
裏山の首なし羅漢神無月 (11)　守啓
石路や無住寺となりし寄せ仏 (11)　万世遊
青年の見つむ海原神の旅 (11)　武子
立冬や常のごとくに夕厨 (11)　璃子

こだま

句集燦々①⑨ (彩131号)

小泉　博

『白金葎』合同句集―俳句とエッセイの紹介と共鳴句。

かまつかや出会ひ頭の「いやんばい」

飯田孝三

悪霊ならず昼眠る五位鷲は

増田陽一

石たたき新調の靴覗きに來

増田悦子

春光や白金葎の白高穂

光成高志

鮎桶を軒端に干して秋日和

光　　みち

受験子に生みたて卵届きけり

吉羽多美子

女声の身に印旛の大根干し

倉田紀子

初暦まづ診察日書き入れる

浅野正美

生きること飽きても八月十五日

松村幸一

萩咲くや忍ぶ恋にも似たりけり

武者昭七

春の水芹を育てて澄みにけり
七草粥蓬薺は庭の草

山尾かづひろ吟行ノートH 28・11・06

外出の肩のほらそこ木の葉髪

袴すつぱりぬけし団栗侏儒のこゑ

床這ひし祖母の晩年木の葉髪

掘られゆく蒟蒻芋と土塊と

雑巾にまとわりつける木の葉髪

蒟蒻選り腰掛腰に括りつけ

運座初会の記

青木啓泰
小山陽也

飯田孝三

光 みち

光成高志

磯目健二

小説家漱石は俳人としても有名だ。子規との邂逅が契機になって俳句に熱を入れ、松山、熊本時代も積極的に運座（句会）に参加し自分でも主宰している。英国に留学したときも留学生仲間と何回も運座を開いている。「手向くべき線香もなくて暮の秋」は、ロンドンで子規の計を聞いて詠んだ五句中の一句である。私の所蔵する全集第二十三巻は英詩・漢詩文・和歌・新体詩も収めるが、大部分は俳句によって占められている。俳句に次いで多いのは漢詩文だが、和歌は十首に満たない。巻末の作句の季題別索引は、それだけで一冊の「季寄せ」になる内容と分量をもっている。俳句への漱石の並々でない傾倒ぶりが窺える。子規や虚子の著

作や評伝を読むと、中心的な活動として運座が大きな意味を担っていたことが分かる。俳人仲間との共同作業のなかによく個性を伸長させる運座という、日本独自の文学サークル活動が遠く中世の連歌に遡り、近世以降津々浦々まで拡がり、現代に至っていることは、驚くべきことである。

私はこれまで作句に手を出さなかったが、俳句そのものには魅力を感じ関心も抱いて自分なりの鑑賞をしてきた。現代詩は複雑難解で手こずったが、短詩形の有季定型詩である俳句は自然に訴えてくるものがあり、その豊かな情趣は親しみ易かった。俳句への関心は、年齢を重ねるとともに深まっていた。これまで余技として同人誌に拙い小説を発表してきたが、頽齡になるに及んで筆が鈍り、遠出が億劫になってきた。そんな訳で好きな俳句に集中して楽しめる結社を地元で見つけたいと思っていたのであった。オーブンアカデミーの源氏物語講義で席を並べた光成高志氏とたまたま雑談して、氏が白金殿という俳句結社を主宰する俳人であること、しかも毎月私の住む我孫子の図書館で句会を催していることを知った。次の講義の日、氏は月刊の句誌と浩瀚な合同句文集を進呈してくれたばかりか、主宰する句会つまり運座に誘ってくれた。偉ぶった印象の全くしない人の良さそうな髭もじやの氏の好意に

私は大いに感謝した。もらった句誌と合同句文集を帰宅後に読んで、そこに横溢する和氣藹々たる連衆の絆と高みを目指す文雅の精神とを発見して「之なる哉」と叫びたい気持ちだった。言うまでも無く人間の邂逅には運が付きものだ。共にいそしむ連衆としてこの上無い集まりに参加できる幸運に恵まれたことを私は悟った。かくして平成二十八年十月二十一日正午、私にとり記念すべき「白金葭」運座初会の日を迎えて、我孫子の自宅より白山台地の崖下道を手賀沼池畔の図書館へ自転車走らせた。

和辻哲郎は日本の古典的文芸を論じて、集団的創作である連歌が芸術へ昇華するためには、個と全との弁証法的統一が肝要の急所だったという。いかにも哲学者らしい難しい表現だが、具体的には連歌の付け句の仕方から人と人との共同態のあり様を見ている。句を付ける人は前句の味を徹底的に味わう。その味に没入して己れを忘れるとき、付けるべき句が忽然として浮かび上がってくる。付ける人と付けられる人との間の気が合うところに自他不二の法悦のほか、個人的創作では不可能な予期しない芸術的な達成が実現するといふのだ。その共同は人々の同一化でなく、人々があくまで個であることを通じて「人々個々円成」の上ののみ芸術としての連歌は生まれる。個々円成せる人が一

座の共同参加で創作すること。その創作の一座は同時に鑑賞の座である。だから創作は鑑賞であり、鑑賞は創作である。そのような連歌から出発して自覚的に一つの文藝様式に仕上げたものが芭蕉の俳諧だと和辻はいふ。この創作者同士（連衆）の共働を可能にする場としての運座の精神は今日の運座にも変わらず流れている。白金葭の運座に出席してまず感じたことが、まさにこの和辻のいう個々円成せる人の一座ということだった。のびのびと自由平等に高み深みを目指す雰囲気は快く、ひとりで鑑賞のみしていたときとは全く違う作句の喜びも、感じるようになった。

傘寿を過ぎてオール入れ歯になってからは、発音が不明瞭で自然と口籠もることが多くなった。そのため運座の自己紹介をかねた私の挨拶は甚だ要領を欠き、願いが叶った嬉しさを十分に伝えられなかった。次の運座では、私なりの創作と鑑賞を精一杯披露したいと思っています。

(H 28・10・30)

増田悦子さん追悼句と追悼文

光成高志

蓮見舟少し沈ます人恋し
いかならん山湖に会ひし夏の蝶
青山よ飢して呉れエツコサーン

枯蓮を抜けて並びぬ番ひ鳥

天界の蓮の舟路で逢ふつもり

手賀沼の釣瓶落しは胸を染め

あぢさゐの藍のきはみに逝きませる

玉葱の籠に主^{あるじ}待つ水中眼鏡

波はひき返すプールの向ふから

慰めて慰められて鰯雲

露の世や何故先に逝き給ふ

あめつちに一途の道瓢の笛

薫風やまなかひに見る青い蝶

芒原光の中に逝き給ふ

遠き日の思い出新た走馬燈

数々の思い出照らすスーパームーン

紫陽花の箱根懐かし山湖会

梅雨最中口紅差して逝かれけり

お惚けの悦子さん好きプールと鯛

松村幸一

飯田孝三

夏薊の見てゐる野辺の送りかな
蝉好きの蝉鳴くまでを存えず
骨壺にこほろぎの間続くなり
悦子さん追悼文

光成高志

吉羽多美子

日ごとなる朝のトースト鳥雲に
髪染めてをり水仙に見られをり
時の日のこつこつと割る茹で卵
席ゆずる子にありがとう青葉風(以上霞の会)
待春の畳こけしの影伸びて
嘉久さん冬の土筆が出てゐます

倉田紀子

巻寿司を買う柊の咲くところ
地震のたび潜る机やヒヤシンス
カステラの切り口乾く春の昼

浅野正美

紫蘇摘みて戦後小学五年なり
鉦叩茄子のヘタにて育ちけり
月赤し晩の御飯はギョーザかな

光 みち

石たたき新調の靴覗きに來
葱買ひて優先席も空いてをり
八階まで門松なけれ初筑波

建国記念日遠富士をテラスより

増田陽一

蜥蜴出て挨拶の如ふり向けり

牡丹の芽金魚のやうなヘリコプター

カーテンに透けて大きな春の月

夜が明けて上手に刻む春キャベツ

母と見し吉野の里の蛍かな

玉葱を剥くに水中めがねかな

一口でよき生ビール鳩とべる

体育の日の杖つきで躓けり

初時雨大根の葉に蕪の葉に

妹と揃ひの赤きちゃんちゃんこ

極月の背中を搔いてくれないか

菱喰の啼く江戸崎を思ひをり

鬼やらひ高階に声ひそかなる

すずめ鳴く我にもありし受験の日

菜を洗ふ厨の水も春の水

柏餅葉の乾きゆく早さかな

鯛などと泳いでみたきプールかな

朝のプール私の波が向うまで

私乗れば少し沈むか蓮見舟

胡麻せんべいぱりつと割れて秋の風（'13・'12・'20まで）

湯たんぽのまだ温かく寝てをりぬ

二人には大きすぎたる葱の束

悦子さんは思うまま句を詠んでその句にユーモアが滲む。そこがみちさんと同じ。理屈抜き句。句会で

は制限があり、自由選句できない。全部並べて読むと

悦子さんの個性がだんだんわかつて来る。陽一さんは

そういう悦子さんを愛しておられたに違いない。男が

女を愛するのは身体だけではない。彼女の人となりを

好きになるのだ。若い時は精力もあり、どこでもよく

眠ったりすると、見えるものが限られるのだろう。心

の自由がどんなに大切かわかる。悦子さんのおとぼけ

俳句から滲みでるユーモアが私は好きだった。「私乗れ

ば少し沈むか蓮見舟」は悦子さんの個性を表している。

私は誰にもハンデキャップを付けて句会進行をしては

ならないという思いで、隣の席の悦子さんでも、「悦子

さん！」と呼び掛けていた。元気な頃は「はい」と

声が聞こえたが、これも聞けなくなつて、今に至るの

は残念である。陽一さんから戴いた蝶採集旅行記に必

ず悦子さんの姿があつて、道東カー吟行では、ここか

ら引き返そうと悦子さんが云われ、洪々陽一さんが引

き返す道もあつて、わが身の来し方を思つて羨ましく

思つたことでした。

吉羽多美子

悦子さんとは一度仲違いした事があり、私の方が悪

いのに悦子さんから優しく可愛らしく謝つて下さり、

本当に恥ずかしい思いをした事があります。その様に

悦子さんは優しく可愛らしい人なのです。どうぞ安ら

かにお眠り下さい。

浅野正美

悦子さんと句会で一緒にできたのは8カ月程でしたが、ご自身の思っている事を率直に表現するチャーミングな方という印象が残っております。悦子さんの作句の中で「柏餅葉の乾きゆく早さかな」が私は好きです。わずかな変化に心を止め時間の広がりを感じました。もっと一緒に一緒にしたかったです。ご冥福をお祈り申し上げます。

光 みち

顧みるに悦子さんとは十年以上のお付き合いでした。湖畔吟の手賀沼吟行句会に続き、布佐の菰の会で親しくなり、ご自宅のマンションに招かれて悦子さん手作りのビーフシチューまでご馳走になりました。ビーフシチューがこんなにおいしいものかと感激しました。そのお返しもしないうちに逝かれてしまいました。平成二十年には飯田孝三さんのお世話で箱根吟行でも一緒にしました。いつも陽一さんのそばを離れずお気遣いされる優しく控え目な悦子さん、しかも、おしゃやれでセンスよく、綺麗な方でした。俳句の方は独特な感性の持ち主で、人真似できないものを持っておられました。陽一さん悦子さんご夫妻に出会ってから、いつもあのようにありたいと私たちの目標にしておりました。

陽一さんとはこれからお付き合いしていきます。悦子さん安らかなお眠り祈っております。

飯田孝三

陽一・悦子さんご夫妻とは、「白金菰」の刊行以前に、高志さんに誘われ、何度か手賀沼蓮見舟吟行でお会いした。ご紹介されたのは舟着き場に近い岸辺のベンチ。お二人の穏やかな笑顔に迎えられたのが、昨日のことのように思える。ときには小生が先着したこともあったが、たいていはご夫妻が、湖面を望むベンチで皆を迎えられた。ちょうど八年前の五月末、ご夫妻と高志・敏子さんご夫妻、久保内美清流さんと一泊の箱根吟行をした。箱根路はつつじが散ったばかりで、紫陽花の盛りには間があつたが、登山電車で交わした悦子さんとの会話が懐かしい。かねて、また一度と思いながら果たせなかったのが悔やまれる。美清流兄もすでに亡い。悦子さんの句はありのままを詠んで深い。拵えがないのだ。だから、読み返す度にしみじみ心にしてみる、そして、ほんのりユウモアをまとう。もう、そんな悦子さんの句にお目にかかれない。

陽一・悦子さんのお住いは流山市、筑波、富士を望むマンションの八階（悦子さんの句が教える）。愚妻はたまたま水泳教室の仲間に、長年、同棟の下階に住む婦人がいて、日頃のご夫妻や悦子さんのことを伺ってい

た。「お二人ともあんな穏やかでやさしい夫妻はほかに知らない。奥さんは病院の薬剤師としてばりばり仕事をされ、ふだん、うちの子なんか随分かわいがっていた。だいたいわ、このプールだつて奥さんに勧められたのです」。四年前の十月の例会だったろうか、銀座吟行の紹介にほつと笑まれた、悦子さんの生き生きとしたお顔が忘れられない。「銀巴里の階段ふかき巴里祭」、「少女には苦きビールや巴里祭」や「青葉透く学生街のビヤホール」は、颯々、悦子さんの青春像を髣髴させるではないか。水泳教室のコースがいつもいき違つていた妻は、「ご訃報に「一度、お会いしてお話したかった」といい、絶句した。折節諳んじたりする、御句から二十句を記し悦子さんを偲ぼう。

松葉牡丹スタンプを押すごとく

石たたき新調の靴覗きに來
猫が道よぎる建国記念の日

牡丹の芽金魚のやうなヘリコプター

祭笛鯉口あけて浮かびけり

玉葱を剥くに水中眼鏡かな

青葉透く学生街のビヤホール

「銀巴里」の階段ふかき巴里祭

少女には苦きビールや巴里祭

鈴虫にとつて置くなり茄子のへた

初時雨大根の葉に蕪の葉に

極月のごとごと仕舞ふ靴の箱

極月の背中を搔いてくれないか

教会のマリア見にゆくちやんちやんこ

菜を洗ふ厨の水も春の水

ごろごろとたてよこにあり甜瓜

朝のプール私の波が向ふまで

心臓ほどの蓮の蕾や終戦日

台風に洗はれて月大きく

湯たんぼの冷めて盛んな朝雀

悦子さん安らかに眠りください。
(『白金霞』月次掲載順)
合掌

●
諸家より亡妻への悼句を賜り忝く存じます。またとなき句友の方々のご配慮、ご同情に私は感涙して居ります。誠に有難うございました。
(11.22 陽二)

我孫子日記

	10/21 例会
	10/26 SOA
	10/28 日展
	10/30 印西文化ホール
	11/2 SOA
	11/3
* 2	平成館 11/7 将門神社
*3	外来診察 11/8 SOA
	11/9
	11/13
*4	我孫子 11/16 SOA
	11/18 例会

＊口は喝怒目の達磨冬に入る

平成館に禅を見にゆく神無月

立止る赤衣の達磨図文化の目

禅の中に一節切見る文化の目

*2 将門神社リホームされて冬来たる

*3 遊休地のソーラーパネル冬に入る

*4 小春日や陽也さんはよくしゃべる

団栗の艶々一つ直哉邸

未だ枯れぬ蟪蛄あるブツクラツク

編集後記

悦子さん追悼号をと思いながら私の急病の所為で今月になりました。悦子さんをお知りの方々から追悼句追悼文を寄せて頂き編集子として感謝の意を表します。

昨日も五年前の大地震の余震があり、津波も来て東日本の皆々大急ぎで避難したとか、私はベッドで揺れ

みち高志

// // // // // //

を感じていました。本誌はあの地震直後に創刊したものです。これだけ日が経つてようやく本誌がかたまつて来ました。

・各人独立した俳人の集りで各々の流儀で各々の信念でもって作句されたものが投句される。そのまま編集するのが私の役目。

・読者からの便りは全部掲載してそれぞれの生活感、季節感を共有する。これは思ったより大切な文芸だと思う。

・俳誌交換は、平野ひろし主宰の「彩」、山尾かづひろさんの「あすか」同吟行ノート、長屋璃子さんの「東京クラブ」の三誌である。これでも十分俳壇の様子がわかるのもう右顧左眊しない。

・エッセイは私の芭蕉の軽み以後と武者昭七さんの宮沢賢治が当分つく。これは是非目を通していただきご意見など聞かせて下さい。

以上で後記としました。なにか書き忘れたことがあるように思われますが、とにかく次の十周年を目指して進みます。東京五輪の翌年になります。

$$\begin{pmatrix} \text{H} \\ 28 \\ \cdot \\ 11 \\ \cdot \\ 23 \end{pmatrix}$$

白金葭 11月号 (第69号) 平成28年11月発行
編集・発行人 光成高志…(〇四―七一八七一―一〇六八)
発行所 270・1119 我孫子市南新木 2・14・17
表紙の題字…加納綾女。写真…11月22日の白金葭

